

タイトル：目の前のことにいつも全力、それが自分らしい次の一步へ

株式会社 LITALICO LITALICO ジュニア サービス開発グループマネージャー

東京学芸大学大学院 教育学研究科 特別支援教育専攻 修士課程修了／博士課程在籍中

吉田有里(2006年3月卒業・高58)



あなたはメガネをかけていますか。

視力が悪いと寝起きはとても不便かもしれませんが、日中メガネをかければ大きな不便を感じることは少ないでしょう。遠くの文字が見えづらいとき、「見えないなあ」とつぶやくと隣の友人が教えてくれることもあるでしょう。視力が悪いという特徴は変わっていないのに、その時々で困ったり、困らなかつたりする。不思議だと思いませんか。

私の働く会社のこと

わたしの働く LITALICO という会社では、障害のない社会をつくることを目指しています。もう少し具体的に言うと、障害や困難を相互作用の結果として捉え、社会の側にある障壁をなくすことで、すべての人の可能性が最大限に広がる社会を作ろうとしています。冒頭の「メガネ」の例で考えてみます。個人の要素（視力が悪い）と、環境の要素（メガネの有無や見たいものとの距離）がかみ合うときには不便さを感じにくく、かみ合わないときには相互作用の結果として不便を感じます。このとき多くの人は「視力がよくなればいい」とは考えず、「メガネをかければいい」「前の席に移動すればいい」「見えなかったら教えてあげるよ」と考えるのではないのでしょうか。社会の側にある障壁をなくすことの一例です。LITALICO では、学ぶことや働くことに障害のある方を対象とした福祉サービス等を展開しています。わたしの所属する LITALICO ジュニアは、学ぶことや遊ぶこと、生活することに困難を感じているお子さまを対象とした発達支援の教室です。「知的障害」「発達障害」などと診断名のある子もいれば、医師の診断はないけれども困難を感じている子もいます。生活場面全体を見据えて、何を願っていて何に困っているか情報収集と整理をしたうえで必要な支援を行うとともに、お子さまを中心としたチームでサポートができるよう、ご家族や幼稚園・小学校等とも連携します。本人の好きなことや夢中になれることを活動の中

心に置き、遊ぶように学びながら、自分らしく生きる力を育むことを目指しています。

きっかけとなった一つの出会い

わたしがこのような仕事を目指すきっかけとなった一つの出会いがあります。大学生のとき、家庭教師のアルバイトを通じて出会った兄妹です。おしゃべりが大好きでよく笑う兄妹でしたが、勉強はとても苦手でした。学校の宿題をやるのにも一苦労ですし、「わからないからやりたくない」思いが重なり、家庭教師の時間に居眠りをしてしまうほど。当時の私は知識もスキルもなく、「学校でうまくいかず家庭教師を頼ってくれたのに何もしてあげられない」と自分の力不足を痛感しました。同時に、彼らはきっと学ぶことの楽しさを知らないままになんとか大人になるのだろう、こういう子どもたちは世の中にたくさんいるのだろうと想像しました。そして「そんな世の中、いやだな」と純粋に思ったのです。

進路の方向転換

それまでわたしは、スクールカウンセラーになりたいと思っていました。中学時代、どうしても友人関係がうまくいかないことがあり、担任の先生ではなく、第3者的に子どもを見守ることのできる存在になりたいと思っていました。スクールカウンセラーになるには、きっと学校のことをよくわかったうえで心理学を学べたほうがよいだろうと、教員免許の取れる心理学科がある東京学芸大学を志望しました。当時はまだ自校推薦の枠がありましたので、立高時代は国語科の先生にお願いをし、小論文の添削を何度もしていただきました。無事志望校に合格し、キャンパスライフを満喫していた1年生の夏ごろ、先の実験がありました。

スクールカウンセラーになるためには臨床心理士を取得する必要があります。大学院に進学し、乳幼児から老人期まで幅広い分野の心理学の知識を身に付け、実務経験を積んだのちに、試験を受けます。しかし、臨床心理士を取得しスクールカウンセラーとして学校に勤務することで、先の兄妹のような子どもたちのサポートはできるのだろうかという疑問がわき始めました。自分の興味関心外のことにも多く時間を割くのであれば、より専門的な勉強ができる場所に進路を転換して、学校の外で子どもをサポートする仕事をしてみたいと思うようになりました。そこで心理学から特別支援教育に専攻を転換し、大学院へ進学。修了後は「子どもたちが学びたいと思ったときにわくわく学べる社会を作るために、関わる大人が手を取り合って子どもを支えるネットワークをつくりたい」とLITALICOに新卒で入社しました。

立高時代を振り返って

今思えば、立高時代にこのような職業についているとは想像もしていませんでした。というよりも、当時はこんなことをやっている会社はありませんでした。立高時代はダンス部に応援団にと部活に勤しみ、合唱祭や文化祭も3年生まではりきって取り組み、まさに青

春の日々。一方で、勉強もまじめにやらないと気が済まないタイプで、コツコツ毎日ノートを取り、定期考査も地道に試験勉強をして取り組みました。良くも悪くも完璧主義でしたので、目の前のことにいつも全力、ただそれだけでした。

しかし今となってはそれがとても大切なことだったのだと思います。目の前のことをいつも全力で頑張っていると、そこでの経験や出会いからやってみたいことや解決したいことが生まれることがあります。中学時代の経験から夢が見つかり、立高時代はスクールカウンセラーを目指して進路を決めました。そして日々を精一杯学び遊び過ごしたからこそ、かけがえのない仲間と絆を深め、志望校に合格して夢にも一歩近づきました。大学生活でも新しいことに挑戦しながら目の前のことに全力で取り組んでいると、新たな出会いがありました。解決したいことチャレンジしたいことが生まれて、新しい夢ができました。そして躊躇せずに方向転換し、またその場所で、全力で取り組んだからこそ、今のわたしのキャリアがあります。

立高生のみなさんへ

人には、大きな野望や目標から逆算して進む人と、目の前の経験から次のステージを決める人がいるそうです。どちらがいいというわけではありません。自分が何にわくわくし、何に憤り、何をモチベーションの源泉として行動していくのかをよく知り、自分に合った次のステップを選択していくことが大切です。

少年よ大志を抱け！と言われても、本当はピンとこないという人もいるかもしれません。私もそうです。そんな人は、まず目の前のことに全力で取り組みましょう。チャレンジし、やりきりましょう。そして自分の心がどう動くか見つめてみてください。わくわくすること、夢中になること、いやだな、変えたいなと思うこと…きっとあなただけのモチベーションの源泉につながるヒントと、次の一歩が見つかります。次の一歩が最初の予定と変わってしまっても大丈夫。あなたらしい素敵な人生選択ができますように、心から応援しています。